

平成30年度 自己評価表

鳥取県立皆生養護学校皆浜分校

中長期目標 (学校ビジョン)	学び 輝き 感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、よりよく生きることができるようにする学校 《 18歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のQOLの向上～ 》	今年度の重点目標	1 幼児・児童・生徒一人一人が「いきいきと学ぶ」教育に努める。 2 保護者の願いや地域の期待に応える。 3 幼児・児童・生徒の健康と安全を守る。 4 センターの機能を推進する。 5 開かれた学校を推進する。
-------------------	--	----------	---

年 度 当 初					評 価 結 果 ( 9 ) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人が「いきいきと学ぶ」教育の充実	小学部 個に応じた支援や教育の充実	○児童の状態に応じた学習や活動への参加の仕方について、提案・交渉を重ね、次第に児童の登校が安定してきた。さらに、安心して学習や活動に取り組みめるようにするため、効果的な支援のあり方について、保護者や教職員間の連携を深める必要がある。 ○一人学級における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業改善に取り組んでいく必要がある。	○主体的・対話的で深い学びに向けた授業実践の積み重ねを通して、児童が積極的に学習や行事に参加したり、本校の児童との交流に複数回取り組んだりすることができる。	○児童が抱える不安を早期に把握し、学習や活動への参加の仕方について提案・交渉して不安の軽減を図る。また、送迎時等における保護者との会話や、教職員間での情報交換を密に行う。 ○児童自らが考えることを大切にする授業に取り組む、本校の児童との交流を通して、同世代とのコミュニケーション力の向上を図る。	○送迎時の保護者との会話や学部内の情報共有を行い、児童の心身の状態に応じて学習や活動の調整を図った。また、行事に向けて不安軽減を図り、安心して参加できた。 ○総合的な学習や理科、音楽で、先生方を招いて発表会を行った。表現のよさを認めてもらい、大きな自信となった。 ○本校の児童との交流が進み、相互理解やコミュニケーション力の向上につながっている。	B	○今後も保護者や教職員間の情報共有を確実にし、児童の心身の変化を見逃さないようにする。行事については、中学部との連携を図り、安心感や達成感が得られるようにする。 ○対話的な学習の経験が広がるように、中学部生徒との協同的な学習や本校の児童とフェイスタイムでやりとりする機会を設ける。
	中学部 心の安定と意欲を高める支援の充実	○生徒、保護者が本人の病状や学習の状況を理解し、進路決定に向けて学校生活を充実させていくことが必要である。	○個々の生徒の授業への出席率が上がり、安心して学校生活を送ることで、自分の進路についての展望が持てるようになっていく。	○本人、保護者、教職員が生徒の病状や学習状況を共有し、情報交換しながら個に応じた学習指導や進路指導に努める。	○月に1回、中学部会で生徒についての状況を共有するだけでなく、普段から情報交換を密にし、個に応じた支援に生かすようにしている。 ○9割の生徒が「学校生活で楽しみがある」と答えている。また、5割以上の生徒の出席率は上がっているが、2割の生徒は下がっている。	C	○これまでの取り組みを継続し、心の安定を図りながら行事や様々な取り組みを個に応じた経験できるように提案交渉し、生徒自身が自信を持てるようにしていく。 ○カウンセリングや面談を通して心の安定を図りながら自分の課題を意識させ、克服に向けて段階的に支援する。 ○個々の生徒の課題を見直し、より興味関心が持てるように指導を工夫していく。
ニーズに対応できる専門性の向上	研究部 主体的・対話的で深い学びを育む授業づくり	○授業研は子どもに負担のない形で公開し、授業研究を深めることができた。 ○学習や行事を通してかかわる力を養い、自己肯定感が育ってきている。 ○学校生活に大きな抵抗感をもつ子どもに対しての方策を研究していく必要がある。	○学習指導要領の視点から、学習の目標を立てたり、「主体的・対話的で深い学び」を育てる授業を検討したりする校内研究が行われている。	○主体的・対話的で深い学びなるように、授業中の子どもの姿や授業の工夫・支援についての実践を整理・分析する。 ○本校で行われる授業改善や子どもたちとの接し方についての研修会に継続的に参加する。	○本校での研修に参加して研鑽を深めたり、交流をしたりすることができた。 ○登校が安定している児童・生徒については、より主体的に学習に取り組めるよう、授業を工夫し、支援した。 ○安定しない児童・生徒に対しても無理なく学校生活を送られるように個別の支援や授業改善の研究を深める必要がある。	C	○本校での研修等に継続して参加するとともに、全員で共通理解できるよう、資料の回覧・配付を行い実践に生かす。 ○よりわかりやすい学習につながるように、視聴覚機器の研修を行い、授業改善に生かす。
	支援部 実態に応じた指導・支援につながる研修と教育相談の充実	○病状により、対人関係に不安があったり、集団生活に緊張を抱いていたりする児童生徒が多い。今年度、教職員の半数が入れ替わっていることから、病気を正しく理解し、学校生活における不安や緊張の軽減につながる支援ができる専門性が不可欠である。また、保護者の子育てに対する支援が必要なケースもあり、児童生徒の将来の自立を考えた支援のあり方を検討する必要がある。	○正しい病気の理解に基づき、個に応じた適切な教育相談が日常的になされ、児童生徒や保護者へのアンケートも満足度が高くなっている。	○病気に関する基礎的・基本的な内容の研修を、合同カンファレンスの際に実施する。また、医療機関やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等との連携を図り、適切な支援のあり方について検討する。 ○教育相談計画の提案や、教育相談についての研修会を通して、教育相談の意味や重要性について共通理解を図り、教職員一人一人の意識を高めるようにする。	○病識研修を通して病状への正しい理解を深めることができ、児童生徒の個に応じた支援に役立てることができた。 ○アンケートで9割以上の保護者が「学校の職員は、相談しやすい雰囲気がある。」と答えている。 ○本校、医療機関、SC、外部関係機関との連携を図っている。 ○アンケートの結果、「先生方にはなかなか相談ができない。」と感じている児童生徒もいるため、信頼関係の構築に努める必要がある。	C	○教育相談や病識の研修を実施し、教職員一人一人の理解を深め、児童生徒への適切な指導・支援につながるようにする。 ○各関係機関と連携し、協力して児童生徒の自立につながる支援にあたる。
健康校と生活安全にお確ける	健康安全部 心身ともに良好で、登校し学習できる環境づくり	○心の問題が体に表れるので健康観察を丁寧に実施し、その日の児童生徒の心身の状況を把握する必要がある。	○児童生徒の心身の状況を把握することで無理のない形で授業に参加することができ、出席率等が向上する。	○朝の健康観察の他にも常時心身の状況を把握し、情報を共有して支援に努める。 ○自分の心身の状況を訴えることができるように支援する。	○児童生徒が自らの体調を訴えることができるようになってきている。無理をせず休養をとることで長期欠席にならずにいる。 ○昨年度に比べ5割の児童生徒が出席状況が改善している。 ○心配な児童生徒の情報が速やかに共有され支援に生かされている。	B	○困っていることを言えない児童生徒がいるので健康観察が重要であり、自分の心身の状況を理解できるように支援し自分に合った休養の仕方が選択できるようにする。 ○今後も情報共有に努め、個々に応じた支援をしていく。

評価基準 A: 十分達成 [100~80%] B: 概ね達成 [80~60%程度] C: 変化の兆し [60~40%程度] D: まだ不十分 [40~30%程度] E: 目標・方策の見直し [30%以下]